

苺パニック2

～イチゴサンタ編～

1 謎のひと（苺）

むふつ、やつぱこいつ、かわいいなあ。

手のひらに、ちよこんと載つかつてているペンギンを見つめ、鈴木苺は目尻を下げた。
うーん、この子、どこに置こうかな？ くるつと回り、部屋を見渡す。このワンルームは彼女の
住まいだ。いまもまだ信じられないが、どうやら夢ではないらしい。

実は五日前の日曜日、苺はショッピングセンターの宝飾店に、思いがけず就職することになった。
今年の三月、専門学校を卒業したものの定職に就くことができず、やむなくフリーターとなつて
以来、就職することは彼女の目標で……

でも、まさか、落つことした履歴書を拾われて、そのまま面接されちゃうなんてね。

そのときのことを思い出し、苺はふくくつと笑つた。あんときの無様な自分を思い出すと、笑え
てならないよ。宝飾店の店員なんか務まるのかなつて、いまも不安だけどさ……

苺は、なんでもかんでも揃つている部屋を見回し、腕を組んで胸を張つた。
頑張るしかないよね。店員さん修業も、どーんと来いつてんだ。

「店長さん、受けて立とうじゃないかい！」

いまは出かけていて、ここにはいない店長さんに向けて、大声で宣戦布告する。

店長さんは、藤原爽とおっしゃるのだが、かなり謎なおひとだ。お店のスタッフさんたちから爽様と呼ばれていて、王様みたいに振る舞つている。

美味しい食事をお店に運んできてくれるスタッフさんに対しても、ずいぶんと偉そудし。そのうえ店長さんには、豪華なイチゴヨーグルトを作つてくれる専属の料理長さんもいるらしい。彼はいつたいどこにいるのか、これも謎だ。

店長さんは同じ店で働いている恋人の岡島怜さんと同棲しているようなんだけど……どうやらいまふたりは喧嘩中らしい。

はつきり聞いたわけではないが、店長さん、岡島さんの機嫌を損ねて家に入れてもらえないようなのだ。

そういうとき、このワンルームを使つてたみたいで……

だけど、苺がここに住むことになつちやつたから、店長さんは行くところがなくなつて……仕方がないから、ここに泊まらせてあげたのだ。だつて店長さんつてば、ホテルに泊まるなんて言い出すんだもんなあ。お金がもつたないよ。

店長さんはここに住んでもいいと言つてくれたけど、まさかこんなに喧嘩が長引くとは思つてなかつたんだろうな。もし、こうなることがあらかじめわかつていたら、この部屋を苺に譲つたりしなかつただろう。

そう考えると、泊めてあげるのは当然な気がするのだ。

独り暮らしの部屋に男性を泊めるというのは、ちょいと非常識だなつて苺も思うけど、店長さんは苺のことを、まるで女として意識していない。

同じベッドに寝ても超クール。

前なんて、苺の足が店長さんの足に触れてしまつて、冷たい！ つて怒鳴られたしな。

まあ、豪華版のイチゴヨーグルトを手土産に持つてきてくれるし、苺としては大歓迎なんだけれどね。

店長さんの話だと、今日は岡島さんもお休みらしい。仲直りするならいいタイミングだと思つたんだけど、予定があるとかで、あつさりと振られたみたい。

店長さん、可哀想……

けど、予定がなくなつたからこそ、店長さんは苺の引越しを手伝つてくれたのだ。おかげですつごく助かった。

そんなわけで、いまこの部屋は、苺の荷物でごつちやごちや。片付けに取りかかつたものの、荷を解^ほいては、こいつはどこに置こうかと悩んでしまい、遅々として進まない。

うーん、夕方までにはどうにかしないとね。店長さんが戻つてきて、こうも散らかりっぱなしだと、叱られそう……いや、ねちねち嫌味を食らうことになるな。

嫌味を言われている自分を想像して唇を突き出した苺は、いま手の中にあるペンギンの置物を見て眉を上げた。

何はともあれ、こいつだ。

こいつは、いつだつたか、幼馴染の二ノ宮剛^{にのみやつよし}が家族旅行に行つたから土産だ、と言つて、苺にく

れたもの。

丸っこい頭を指先でつんつとつづついた途端、ひらめいた。

うん。あそこがいい。

ルンルンとスキップして洗面所に向かう。

歯ブラシ立ての隣がいい。なんせベンギンだし……

ベンギンは水が好きだかんね。ジャージャー、水音を聞けたほうが嬉しいに決まってるよ。

歯ブラシ立ての隣にベンギンを置こうとした苺は、鏡に映った自分の姿を見て、「あつひや！」と素つ頓狂な声を上げた。

な、な、なんてこつた！

苺、イチゴな苺のままじやんかつ！

苺は、店長さんから祟り除けとしてこの帽子を被らされたあとのこと、つぶさに思い返した。木登りで、店長さんとどっちが高いところまで登れるか競つたのだが、足の長さの違いで苺は勝負に負けた。ふてくされて木から降り、車まで走つて戻る途中、かけつこの競走のようになり、そのあとは楽しくおしゃべりしながらマンションに戻ってきた。

それからはあとは……

荷物を運び入れるのに、何度も駐車場と部屋を往復。

その間、同じマンションの住人らしき方、数名と顔を合わせて挨拶して……

ああ、それでか……相手の目がどこか冷ややかだつたり、笑いを堪えていたりしているように見えたのは。

まあ、いいか。赤つ恥をさらしたけど、もう過ぎたこと……悩んだところで、いまさらだしね……
とは思うものの、むかむかが込み上げてきた苺は頬をふーっと膨らませた。

なんなんだ！

祟り除けのはずなのに、その祟り除けが赤つ恥の原因になつたじやんか！

店長さんの野郎っ！

苺はイチゴの帽子を鷲掴みにして勢いよく脱いだ。ハーハーと息をつき、鏡の中の自分と睨み合う。イチゴの帽子を被つた苺が他人様の笑いものになつてゐる、店長さんはわかつてたはずなのに。祟り除けだなんて、いけしやあしやあと、よくもまあ言つてくれちゃつたもんだ。

絶対、隠れて笑つてたんだよ。そういうおひとだよ、あの店長さんつてひとはさ。

鼻息荒く、しばし憤つていた苺は、いいことを思いついて、にやりとした。
仕返ししてやろう。

眠つている店長さんの頭に、この帽子を被せてやるのだ。

イチゴの帽子を頭に被せられて、アホ面で寝てゐる店長さんを頭の中で思い描き、苺はケタケタ笑つた。

妄想仕返しですつかり機嫌を直した苺は、手にしたままだつた帽子を無意識に被り、ベンギンを歯ブラシ立ての隣に置いた。

これでよしと。

満足してうんうんと頷いた苺は、歯ブラシ立てに歯ブラシが二本並んでいるのを見て眉を上げた。

一本は店長さんなのだ。

……なんか、変なの。思わず首を捻る。

まるでこの部屋にふたりで住んでるみたいだ。

そういうえば、今夜はどうするんだろう？ 店長さん、またここに泊まるつもりかな？

出かけるとき、『ちょっと出てきます』と言つたし、戻つてくるんだよね？

お店の様子でも見に行つたのかな？

宝飾店のあるショッピングセンターは、ここから目と鼻の先。自転車でも五分くらいで着く。もしかしてもしかすると、店長さん、岡島さんと仲直りするために出かけたのかも。

うーん、だとしたら、ふたりとも素直になれるといいけど……

素直になるべきなのは、もっぱら、店長さんかな？

あのひと、かなり問題ありな性格をしておいでだからなあ。

……さてと、ひとのことより自分のことだ。やることやつちやわなきやね。

やる気をみなぎらせ、苺は洗面所から走り出た。

2 客寄せパンダ ～爽～

どこもかしこもクリスマス一色だな……

ショッピングセンターの中を足早に歩く爽の目に飛び込んでくるのは、クリスマスの彩り。

けれど店舗によつて雰囲気は様々だ。

今日から十二月。客もクリスマス気分に浮かれ始めるだろう。

そして、彼の経営する『ジュエリー Fujiwara』にとつて、最高の売り上げを見込める月でもある。

もちろん店内は、すでにクリスマスの飾りつけを終えている。だがそれだけでは足りない。

客を呼び寄せられるような斬新なアイデアが必要だ。

宝飾店に近づいた爽は歩調を緩めた。

店内には女性客が五人ほどいて、スタッフが対応している。

宝飾店らしい落ち着いたクリスマスの飾りつけがされており、悪くはない。

だがいまひとつ物足りない。

昨年は、クリスマスシーズンを迎えるにあたり、何かインパクトが必要だということになり、爽と部下の藍原要、岡島怜の三人がそれぞれクリスマスらしいスーツのデザインを考えた。そして名を伏せたうえで、祖母の羽歌乃に審査してもらい、爽がデザインしたものが採用されたのだ。

あれはかなりいい気分だったな。怜は納得という顔をしていたが、要は表情には出ていなかつたものの、相当悔しかつたはずだ。

客の評判も上々だつたし、せつかく作つたスーツをこのまま埋もれさせてしまつてはもつたいないのでは、と要から提案され、去年と同じというのはどうかと思ったが、今年もそのスーツを着ることになつてゐる。

予定としてはクリスマスの一週間前から着るつもりだ。けれど去年と同じではインパクトが弱い氣がする。

もつと強すぎるくらいのインパクトが欲しいな。

こう……なんというか……客寄せパンダ的なもの……

パンダ?

爽はきゅつと眉を上げた。

頭の中に、ベストなアイデアが浮かび、爽はにやりと笑つた。

こうしてはいられない。

爽は宝飾店に向かつて勢いよく歩き出した。

愛想よく客の相手をしていた要は、店に向かつてくる爽の姿を目に捉えた瞬間、さりげなく他のスタッフに客の相手を任せ、店に入ってきた爽を出迎えた。

「爽様」

「奥に」

頭を下げた要に小声で伝え、まつすぐスタッフルームに向かう。要は眉を上げ、爽のあとに続く。「やはり、去年と同じスーツだけではインパクトが足りないと思わないか?」
スタッフルームに入り、近くの椅子に座つた爽は、要を見上げて口にした。
聰明な要は「それで?」と聞き返してきた。

すでに要は、爽が何か思いついて、それを実行しようとしていることがわかっているのだ。

「客寄せパンダを置くことにした」

「はい? 客寄せパンダですか?」

「ああ、あとはパンダに着せる衣装が必要だ。これからすぐにデザインを考えよう。昨年同様、審査のうえ選ばれたものを製作担当者に回す」

「怜を呼びますか?」

「休みだからな……。強制しなくていい、本人の意思に任せろ」

「飛んでくると思いますよ。昨年、私に劣らず悔しそうでしたからね」

その言葉を意外に思つた爽は「そうなのかな?」と聞き返した。

「お前ほど悔しがつてゐるようには見えなかつたが……」

要はなにやら意味ありげにくく笑う。

どうやら、怜が悔しがつてゐたというのは真実らしい。

「どうか。やはり怜は私が選んだだけある」

「はい。では、さつそく呼び出しましょう」

「ああ。私は先にデザインに取りかかる」

「では、紙とペンを用意致しましょう」

「いや、自分で用意する。お前は怜に連絡しろ。すでに十一月だ、時間がない」

「了解しました。……ああ、すみません爽様、確認しておきたいことがあるのですが」

「なんだ？」

「コピー用紙を取り出しながら、爽は返事をした。

「パンダとは、鈴木さんのことなのですよね？」

「改めて確認することもないだろう?」

「それもそうですね」

さらりとしたり顔で答える要に、ちょっと苛つく。

「それと、今回の審査はどなたに?」

「そうか、昨年のように羽歌乃さんに審査をお願いするわけにはいかないのだな。

祖母が企画した見合いをドタキャンして以来、爽は祖母から逃げ回っているのだ。意地になつた羽歌乃は、爽の屋敷に居座り、おかげで彼は屋敷に戻れない状況が続いている。

こういうときの避難場所として確保していた部屋を、話の流れで莓に譲ることになつてしまつた。そのために、爽は寝泊まりする場所がなくなり、困っていたのだが……いつの間にやら、莓に明け渡したはずの部屋に泊めてもらうようになつていて……

最初はそんなつもりなど、まるでなかつたのに……どうしてこんなことになつてているのか、爽自

身も不思議になる。

「爽様」

知らぬ間に考え込んでいた爽は、要の呼びかけに顔を上げた。

「怜に連絡しました。すぐに来るそうです」

爽が考え込んでいる間に、要は怜への連絡を終えたらしい。

「ああ、そうか」

「では、失礼して、私も……」

テーブルの上に置いた用紙を取り、要はいそいそと椅子に座つた。

要のやつ、やる気満々だな。だが今回も負けられない。なにせ、莓に着せる衣装なのだ。なんどしても、自分がデザインしたもの草莓に着せたい。

うーむ。昨年のスーツよりも、インパクトのあるもの……

やはり、莓に着せるならサンタチックな衣装にイチゴがアクセントになつてているものだな。そう考えた途端、噴き出してしまう。

視線を感じてさつと前を向くと、要が物問いたげにこちらを見つめている。

爽はコホンと咳をしてごまかしたが、考えまいと思つても、イチゴの帽子を被つた莓が浮かんできてしまい、笑いが込み上げてくるのを抑えられない。

参るな……だが、イチゴ頭の莓は、笑いを誘う。

爽は手元の用紙に、さらさらと思いついた衣装を描き上げた。

確実にインパクトはあるな。だが……これではただの笑い者になりそうだ。宝飾店にはふさわしくない。

うーむ、これはボツか……残念だな。紙をくしやつと丸める寸前、爽は思いとどまつた。

捨てるのも惜しい。取つておくとしよう。

紙をきつちりと畳み、スーツの内ポケットにしまう。

さらに、デザインを考えていると、怜がやってきた。挨拶もそこそこに、すぐに仲間に加わる。かなりの数のデザインを考えたものの、そのほとんどがスーツの内ポケットに収まることになった。

奇抜なものはいくらでも思いつくんだがな……

顔をしかめた爽は、腕を組んで椅子にもたれた。そして目の前で奮闘しているふたりの様子を窺つた。

失敗作か納得がいかなかつたのか、丸まつた紙がいくつも転がっている。彼らがどんなデザインをしたのか、見てみたいが……

「私はこれで行きましょう」

怜が顔を上げ、指先で用紙をコツコツと小突きながら言つ。

自分も要もまだ納得できるものを描き上げていないので、遅れて参戦した怜が先に完成するなんて……

爽は眉を寄せた。

「あの、爽様？」

「なんだ」「審査はどうなたが？」

「怜。自信はどれくらいある？」

「じ、自信？　は、はい……もちろん、採用されると」

明らかに無理をしているとわかる怜の物言いに、笑いを噛み殺す。

「よし。では、怜のデザインを基本にして、作らせるとしよう」

「……それがいいかも知れませんね。時間もありませんし」

要も同意する。

「い、いいのですか？」

実のところ、デザインするのにいい加減飽き飽きしてきた。

すでに彼女に着せたい服のデザインは、いくつも描き、気が済んだ。

「爽様、予算のほうは？」

「ああ、私の趣味のようなものだからな。今回はすべて私が用立てる。その代わり、素材は良いものを選べ。雑な作りは許さない」

苺のクリスマス用コスチューム製作は着々と進められた。

「では、夕食の頃、また来る」

「はい。……あの、爽様」

出口に向かおうとしていた爽は、要の呼びかけに振り返った。

「なんだ？」

「イチゴヨーグルトですが……」

もつたいぶるようく言われ、どきりとする。即座に切り返せず黙つていると、要はしたり顔で「出過ぎたことかとは思つたのですが、大平松おおひらまつに依頼しておきました」と続ける。

大平松とは爽の屋敷の料理長だ。苺に差し入れしているイチゴヨーグルトは、確かに大平松に作らせているのだが……

「イチゴヨーグルト？」

このやりとりの意味をまるでわかつていらない怜が、思わずとくうように呟いた。爽と要の目が自分に向き、少し気まずそうな顔をする。

爽はすぐに視線を要に戻した。むかむかしてならないが、それを表に出しては負けだ。

「そうか。気が利きくな、要。ありがとうございます」

爽はそつなく礼を言った。

「いえ」

笑いを堪こらえている要にさらにむつときたが、なんとか感情を抑え込む。

爽は一度も振り返らずに、店を出た。

要のやつめ……イチゴヨーグルトのことをどこで知つたのか？

大平松だろうか？ 苺が食べていることもわかつているようだ。

渋い顔で従業員専用の通用口に向かっていた爽は、気を取り直し、イチゴな彼女のことを考えた。さて、苺はもう荷物の片づけを終えただろうか？

夕食は実家で食べることにしているようだし、もうワンルームを出て行つてしまつただろうか？ 彼女特製のおむすびの味を思い出し、爽は足を早めた。

まだ部屋にいるなら、おむすびを頼みたい。車に乗り込んだ爽は、すぐさまワンルームに向かつた。

3 子犬の演技 ～苺～

そこそこ荷物を片づけた苺は、ちょっと休憩しよう、そわそわしながら冷蔵庫を開けた。

待ちに待つたおやつタイム！

イチゴヨーグルトをそつと手に取り、スプーン片手にテーブルの前にゆき、床に敷いてあるラグの上に座る。丁寧に包みを開けると、神々しい光を放つイチゴヨーグルトが現れた。

いやーん、やっぱ、めっちゃ豪華版だよ。まさか、二度も食べられるなんてね。むふふーつ。

店長さん、こんなすっごいイチゴヨーグルトを作れる料理長さんを、いつたいどこに隠し持つているんだろう？

さてと、いただいちやうかな。まずは一口目。ぱくんと頬張り、じわじわっと味わう。

うおお、う、うまーっ！

しあわせの鐘が鳴った気がした。

スプーンを止めることができず、二口目、三口目と夢中で頬張る。

「帰りましたよ」

天国にいる気分で、イチゴヨーグルトを味わっていた苺は、その声にぎょっとした。

ぴょんと跳ねて、振り返る。

なんと、ドアのところに店長さんが立っている。

「お、驚かさいで下さいよ。びっくりしたじゃないですか」

口から飛び出した気がした心臓を、元の位置に戻すマネをしながら、苺は思い切り文句を言つた。

「鈴木さん、言いつけを守りませんでしたね」

苺の文句をスルーして叱りつけてくるとは……店長さんわけわかんないよ。

しかし、言いつけて……？

「あの……なんのことですか？」

おずおずと聞くと、店長さんは眉を吊り上げた。

「私が出かけたらすぐ、玄関の鍵をかけるようにと言つたはずですが？」

ああっ！

「かかっていませんでしたよ」

そ、そうだった。あのとき苺、荷物の入った袋をあさつて、あとで鍵をかける気でいたんだけああっ！

ど……結局そのまんま……

「チャイムを鳴らしても、なんの反応もなかつたので、試しにドアノブを回したら……鍵をかけ忘れるなんて、あまりに不用心ですよ」

頭ごなしにガミガミ叱られ、苺はうなだれた。

「す、すみません」

「うん？ ……どうやら、そのイチゴヨーグルトに気を取られ過ぎていたようですね」

その指摘に、苺は思わず両手でぱつとイチゴヨーグルトを隠した。そして、いまさらな行動だと気づいて顔を赤らめた。

「これから召し上がるところでしたか？」

「いえ、も、もう、召し上がらせてもらつてたです」

「……鈴木さん。召し上がるは尊敬語であつて、自分に対してもうものではありませんよ。この場合は、頂くと言ふべきですね」

「い、いまのは、売り言葉に買い言葉つて感じのやつですよ」

何か言ひたげに店長さんは眉を動かしたが、もう苺の言葉に對してコメントしなかつた。

この場の雰囲氣にいたたまれず、もじもじしてしまう。

「ところで鈴木さん」

「な、なんですか？」

今度は何が来るかと、スプーンを盾にして思わず身構える。

「イチゴの帽子、まだ被つたままですよ」

えつ？

驚いて頭に手を当てた苺は顔をしかめた。

洗面所で気づいたとき頭から取つたつてのに、わ、わたしつてば無意識にまた被つちゃったのか。それでも、店長さんときたら、今頃指摘してくるとは……

苺は店長さんを睨みつけた。

「知つてますよ！」

さつさと教えてくれば、余計な恥をかかずにすんだのにさ。

「おや、そうでしたか？」

おや、そうでしたか？……じゃないしつ！

「店長さんつてば、あんなに自信持つて祟り除けって言つたくせに。苺、こいつのせいで赤つ恥かいちやつて、ちつとも祟り除けになんてなつてないじやないですか！」

「それは思わぬ落とし穴でしたね」

「はああ～？」

何を言つているのかわからない店長さんに、尻上がりな物言いになつてしまつ。

「相殺するつもりが……。しかし、人の目というのは不思議なものですね」

相殺……何を相殺するつて？

「そんなに目立つものなのに、……慣れ、でしようか？」

「慣れ？」

「つまり……意識しなくなるということですよ」

その言葉は、残念ながら納得できた。

苺自身、この帽子を自分が被つているということを今の今まで忘れていたのだから。

「食べないんですか？」

促されて、苺は祟り除けうんぬんについての憤満^{ふんまん}を、置いておくことにした。

「食べますよ」

苺はスプーンにヨーグルトを山盛りにすくい、口に入れる。

「うひょっ」

やっぱ、うまいつたらない！

「……美味しそうですね。私にも一口いただけませんか？」

「ええっ？」

受け入れ難いお願ひに、思わず声を上げてしまう。

「駄目……ですか？」

見捨てられた子犬のような店長さんの表情に、胸がきゅんとする。

な、な、なんて顔をするんだ……

そんな目で、そんな哀しい声を出されちゃ、苺まるつきり、極悪非道なひとになつた気がするじやないか。

「……べ、別に……いい……ですよ」

「食べさせてくださるんですか？」

ぱつと笑顔になつた店長さんは嬉しそうに言う。

店長さんのお尻の部分に、子型犬のふわふわした尻尾が見えた気がした。

そいつが苺の頭の中で、パタパタと左右に揺れる。

苺は仕方なくスプーンでヨーグルトをくくうと、店長さんの口元に運んだ。

少しの躊躇ためらいも見せず、店長さんは口を開けてパクンと食べた。

店長さんの口からスプーンを引き抜いた苺は、何もついていないスプーンの輝きに、なんともいえない気分がした。

「イチゴが……」

呟きが聞こえ、苺はスプーンから視線を外して、店長さんに目を向けた。

「なんですか？」

「いえ。……イチゴが入つていなかつたものですから……イチゴヨーグルトなのに、イチゴが入つていないので……こう、味わつた気がしなくて……」

ひどく残念そうに言われ、苺は気が咎とがめた。

どうやら、無意識にイチゴをよけてすぐつていたらしい。

「そ、そんなつもりは……そ、それじゃあ……もう一口」

仕方なく申し出る。

「いただけるんですか？　でも、よろしいんですか？　鈴木さんのぶんが……」

申し訳なさそうに言われ、苺は無理して笑顔を作つた。

「だ、大丈夫ですよ」

そう言つたものの、ガラスの器の中のイチゴヨーグルトを確認すると、すでに半分になつてゐる。な、なくなつちゃう……けど……大丈夫って言つちゃつたし……

今度はそこそこでかいイチゴを載せて、店長さんの口元に運ぶ。

これまた遠慮なく口に含んだ店長さんは、満足そうに微笑んだ。

「本当に美味しいですね」

「でしょでしょ？」

思わず声を上げてしまい、苺はしまつたと顔をしかめた。言葉を省略してはいけないと注意されてたのに……

また叱られるものと思つたが、店長さんは苦笑しただけで何も言わずに、また口を開けてみせる。叱られずに済んでほつとしたけど……こいつは、またおくれという意思表示か？

「今度は苺の番ですよ」

たしなめるように言い、苺はスプーンにてんこ盛りにしたイチゴヨーグルトを頬張つた。

「今度は苺の番ですよ」

再び天国にいる気分を味わっていた苺は、店長さんに肩を叩かれて、あつという間に天国から現

実に引き戻された。

「こう申し上げてはなんですが……」

「なんですか？」

いい気分でいたのを邪魔され、むつとする。

「鈴木さんのスプーン一杯と、私の一杯は、量がかなり違ったように思うのですが」

ぐつ！

「……そ、そんなことはないですよ」

否定したもの、頬が赤らむ。

「それではいま鈴木さんが召し上がったぶんと同じだけ、今度は私にも食べさせてくださいるんですね？」

店長さんは確認するように言う。

な、な、なんだ？　まだ食べる気なのか？

そろそろ遠慮してくれればいいのにさ……

苺は仕方なく、自分が食べたぶんと同じ量のイチゴヨーグルトをスプーンにすくって店長さんに差し出したのだつた。

4 特別に触れて　～爽～

「店長さんてば！」

仕事に集中していた爽は、その呼びかけに一瞬、パソコンの画面から視線を上げた。苺がドアのところに立ち、頬を膨らませて爽を見ている。

「何か？」

パソコンの画面を見つめたまま、苺に問う。

「だから、苺、これからご飯食べに家に帰るつて言つたですよ」

家に？

ようやく苺の言葉が頭に入ってきた。

「あ、ああ……そうですか。わかりました」

「それじゃ、苺、行つてくるですよ」

プリプリした様子で背を向ける彼女に、爽は慌てて「鈴木さん！」と声をかけた。もう少ししたら夕食を食べに店に戻らなければならないのに、鍵がないと出かけられない。「はい？」

「私も夕食を食べに出るので……すみませんが、スペアの鍵をお借りできますか？」

「ああ、はいはい」

苺は安易に了承し、飾り棚の引き出しから鍵を取り出す。

「これ 店長さんが持つてるといいですよ」

その言葉に少々戸惑う。

鍵を預からせてもらえるのは爽としてもありがたいのだが、自分の部屋の鍵をよく考えもせぬ、男に渡すのはどうかと思う。もちろん、鍵を貸してくれと言った張本人が、そんな説教をするのはお門違いなのはわかっているが……

すでに鍵を受け取ってしまったわけだが、私に鍵を渡す前に、貴女はもつと考えるべきではないか、という示唆を含めて「いいんですか?」と問い合わせ返すも、苺は気楽な調子で「はい」と答える。これはもう、彼女に信用されているのだと、単純に喜んでおくか……

「それじゃ、苺、ご飯食べてくるで~す」

「あっ、鈴木さん」

またも慌てて呼び止める。危うく、大事なお願いを忘れるところだった。

「今度はなんですか?」

何度も呼び止めたせいなのか、苺は少々迷惑そうに振り返る。

これまで、他人からそんな態度を取られた経験がなかつた爽は一瞬むつとした。だが、文句を言える立場ではないと、気を取り直した。これからお願ひすることは、爽の一方的な申し入れなのだ。彼女の気分を害するわけにはいかない。

「おむすびを忘れないでくださいね」

昨日の朝食の席で、苺が取り出した朝食用のおむすびがあまりに美味しそうで……

しあわせそうに頬張つてゐる彼女に、思わず自分の朝食と取り替えてくれと無理強いしてしまつた。大平松の作つてくれた朝食が不味いわけではなかつたが、苺の手作りのおむすびは、言葉にできない好ましい味がした。今朝も食べさせてもらったのだが、やはりとても美味しかつた。すでに明日の朝が待ち遠しいくらいだから、絶対に忘れてきてほしくない。

「わかつてるですよ。約束したんだから、忘れたりしませんつて。梅干しばつかでいいんですか?」

「鈴木さんにお任せしますよ」

「了解です。では、行つてくるですよ」

大きく手を振り、苺は部屋から出て行つた。

行つてくるか……なにやら胸がくすぐつたい。それに、このスペアキーも……
爽はいい気分で、それをポケットに入れ、仕事を再開した。

一時間後、爽は疲れを感じて、大きく伸びをした。そろそろ食事をとりに店に戻るとしようか……

パソコンを閉じ、立ち上がる。

部屋を見回した爽は、ふつと笑みを浮かべた。ずいぶん綺麗に片付いている。

ワンルームに戻つてきたときは、まだまだ荷物があちこちに散乱していたのだが……私が仕事をしている間に、かなり頑張つたようだ。

爽が仕事をしている間、苺はちよろちよろと動き回っていた。目の端にちらちらするのが、少々気になる一方で妙に楽しくもあった。
彼女がいないと……なんだか物足りないな。さほど広くない部屋なのに、ガランとしてしまったようを感じ、寂しさを覚える。苺がいなかつた頃は、なんとも思わなかつたのに……妙なものだな……

うん?

飾り棚の上に、イチゴの帽子が置いてある。

荷物を片付けていた最中も、ずっと彼っていたのに、ついに脱いだんだな。

くすりと笑い、帽子を手に取つて、感触を確かめる。

それにもしても面白かったな。この帽子もだが……神社での木登りも、昼食を奢つてもらつたことも。彼女は、本当に意外性の塊だ。

ラーメン屋には、近いうちに行くとしよう。苺のようにあの店のスタッフたちに常連として認められるためには、定期的に通う必要がある。あの半自動のドアを開ける体験もしたいし……

本音を言えば、毎日通いたいところだが、ここから少々距離があるから、仕事中には行けないしな。となると、今度行けるのは次の休みの月曜日かな……

そうだ……あの宝石箱はどこに? 取れてしまつたイチゴを元通りにくつづけてやろうと、接着剤を買ってきただが……

部屋中に視線を走らせ、本棚のどころに置いてあるのを見つけた。

彼女の私物なので、手に取るとき、いささかためらいを感じたが、勝手に触つたからといって、機嫌を悪くしたりはしないだろう。

宝石箱の蓋を開け、中に入つているイチゴを摘んで取り出す。

接着剤をつけると、あつという間に元通りになり、爽は笑みを浮かべた。

戻ってきた苺がすぐ気づくように、宝石箱をテーブルの上に置き、爽は部屋をあとにした。

5 ハートがポポン～苺～

「それで、荷物は片付いたの?」

母の問いに、シーフードのたっぷり入つたシチューをすくつていた苺は頷いた。

「うん。まあまあ終わつたよ」

問い合わせ、シチューを味わう。

「うふっ、おいしーっ」

苺の手放しの称赞に、兄嫁の真美さんは嬉しそうに微笑んだ。

兄の健太は、「当然だ」と、満足そうに言う。

「あんた、店長さんに、何か引越しを手伝つてくれたお礼したほうがいいんじゃないの?」「したよ」

「あら、そうなの？」

「うん。お昼をご馳走した。それもデザートつきだよ」

苺は自慢げに言つた。

「まあ順当だな」

健太の言葉に、苺はにまつと笑う。

「でつしょう？」

なのに、イチゴヨーグルトまで食べられちゃつてさ……

冷静に考えてみると、胸キュンな子犬の表情や残念そうな表情……ありや全部、苺を^{だま}騙して楽しむための、店長さんの演技だったようと思えてならない。店長さんと競うようにして食べたせいでも、一度目のイチゴヨーグルトもちゃんと味わえなかつたし……

「はあ！」

「ため息なんぞついて、どうした？ なにか不都合なことでもあつたのか？」

心配そうに父から聞かれ、苺は顔を上げた。

「いや、イチゴヨーグルトのことでき」

「なんだ、イチゴヨーグルトか」

父ときたら、気が抜けたように言う。娘のため息の原因に、まるで興味を失くしたようだつた。

夕食の片づけの手伝いを終えた苺は、自転車に乗つてワンルームへと戻つた。鞄の中には店長さ

んと約束したとおり、ちゃんとおむすびが入つてゐる。

夜になつてかなり気温が下がつたようだ。冷たい風を受けたほつぺたは冷え切つてしまい、真つ赤に染まつてジンジンする。

部屋は空っぽで、苺が家に戻る前にパソコンでなにやらやつていた店長さんはいなかつた。

自分も夕食を食べに行くつて言つてたもんね。たぶん、お店に戻つて食べるんだろう。

苺は、三連パックのイチゴヨーグルトを袋から取り出しながらキッキンに入つた。ここに戻る途中にある小さなスーパーで買つてきたのだ。ヨーグルトを冷蔵庫の中に入れ、おむすびの包みを流し台の上に置く。

店長さん、喜んでくれるかなあ？

キッキンから出てソファに座ろうとした苺は、「あれっ？」と足を止めた。テーブルの上に、宝石箱が置いてあるのだが……蓋^{ふた}の真ん中に、ちゃんとイチゴが載つかつている。

うわっ！ て、店長さん、直してくれたんだ！

嬉しさに胸を膨らませて、苺は宝石箱を手に取つた。

ちっちゃなイチゴを、指先でそつとついてみる。

うん、取れない。しつかりくつついでいるようだ。

苺は口元を緩めた。

仕事に関しては厳しいし、ちょっとばかり口うるさい店長さんだけど、一緒にいて愉快な相手だ。
冗談も通じるし、ちょいとそそのかしたら、木登りだつてやつちやうんだもんね。

今日のことを思い出して、苺がふくくつと笑ったそのとき、呼び鈴が鳴った。

おっ、店長さんだよ！

玄関へすっ飛んで行き、ドアを開ける。

「おつかえりなさい！」

「……えつ、ええ……ただいま」

苺の賑^{にぎ}やかな出迎えは不意を突くものだつたのか、店長さんは口ごもりながら返事をする。

「イチゴ、くつづけてくれてありがとうございました」

手にしていた宝石箱を差し出して見せながら、苺はお礼を言つた。

「ああ。たいしたことではありませんよ」

店長さんはそつなく答え、靴を脱いで部屋に上がつた。そして苺の宝石箱を取り上げると、空いた手のひらの上に別のものを置いた。

「こ、これは？」

もしや……イ、イチゴヨーグルト？

「泊めていただきお礼ですよ」

ま、またもらえるなんて……

あまりの嬉しさに、全身からハートがポポンと飛び出た気がした。

「店長さん、ありがとうございます」

苺はびょんと大きく跳ね、荷物と宝石箱で両手が塞^{ふさ}がつている店長さんに、キュッと抱きついた。

6 理解できない自分 ～爽～

まつたく彼女ときたら……

風呂に入るのに服を脱ぎながら、爽は顔をしかめた。

あんな風に抱きついてくるなんて……危うく手にしていたものを落とすところだつた。

彼女が大事にしている宝石箱も持っていたというのに……

だいたい、あのイチゴヨーグルトは彼女を喜ばせようと思つて持つてきたわけではない。要が勝手に大平松に頼んで作らせたのだ。

むかついてならないのは、自分は心臓が飛び出そうなほどドキドキさせられたというのに、彼女は単純にイチゴヨーグルトが食べられるのに舞い上がり抱きついてきたことだ。そのうえ気を良くして、先に風呂に入れと勧めてきた。

あー、あんなことくらいでドギマギした自分に腹が立つてならない。

苛立ちまぎれに、ボディソープを不需要なほどプッシュして身体を洗う。気に入っているソープの香りは心地良く、シャワーで洗い流している間に、爽はいくぶん気が収まつた。

「お先に失礼しました」

「はーいです」

いつもの気の抜けた返事に、つい口元が緩む。

入れ替わりで苺が風呂に向かい、爽は仕事を戻つた。滞つている仕事を片付けなければならぬ。駄目だな。苺で遊び過ぎだな。仕事を溜め込むなんて、これまでなかつたのだが……。仕事より楽しいことがなかつたからな。ふとそう思った爽は眉をひそめた。

……仕事より楽しいことがなかつた？

そうかもしれない。休日も好んで仕事をしていたくらいで……。

爽の人生に加わった、鈴木苺という存在は、自分にとつて歓迎すべきものなのかな？ それとも……。真剣に考え込んでいた爽は、我に返り、頭から苺を追い払つた。

また苺に囚われている。いまは仕事に集中すべきなのに。

滑らかな指の動きでキーを叩き続けていた爽は、いつの間にか苺が戻つてきてることに気づいた。手を止めずにちらりと苺を窺うと、キーを叩いている爽の手元を凝視している。

何を考えているのか？ 気になる……。

すると苺はすっと立ち上がり、キッチンに向かつた。

ああ、きっとイチゴヨーグルトを食べるつもりなのだな。

爽は、きゅつと眉を寄せた。私ときたら、また苺に氣を取られて……。

知らぬ間に手を止めてしまつっていたことに気づき、爽は氣を引き締めて仕事に戻つた。

だが、苺の姿が視界の隅っこに入り込んだ途端、なすすべなく意識が彼女に向いてしまう。

意のままにならない自分に心の内で舌打ちし、爽は苺をちらりと窺つた。
やはりか……。

テーブルの隅にイチゴヨーグルトの器を置き、苺はちよこんと座つている。ひたすら気配を消しているという感じだ。

そうか、私の仕事の邪魔をしないようにと、苺なりに氣を遣つてくれているのだな。

音を立てないように配慮しているようで、苺はそつとイチゴヨーグルトの蓋を開けてスプーンを手に取り、ほつと一息というように、息を吐いている。

なにもそこまで気配を消そとしなくともいいのにと笑いを堪えていたが、どうも自分は、この状況を見誤っているのではないかという疑いが頭をもたげてきた。

イチゴヨーグルトをすくう素振りを見せた苺は、手を止め、さぐるような視線をこちらに向けてきた。爽はさつと顔を背け、何食わぬ顔で仕事を続ける。

視界の隅に、ほつとした様子の苺が入り込んできた。そして、イチゴヨーグルトを食べ始める。どうやら、私の仕事の邪魔をしないように気遣つてくれているわけではないらしい。さつき、苺がイチゴヨーグルトを食べていたとき、彼女の反応がいちいち愉快で、調子に乗つて彼女の大切なイチゴヨーグルトを分けて欲しい、と言つてしまつた。もうそのような状況に陥らないよう、彼女は気配を消そうとしているのだろう。まったく成功していないが……。

またからかつてやろうかという気持ちが湧いてきたが、こそそとヨーグルトを食べている苺も面白いし、今回は、夢のような味を堪能している苺を、邪魔しないでおいてやろう。

「店長さん……」

苺の存在を気にかけていなければ、決して聞き取れなかつただろうと思うくらいの微かな声で呼びかけられ、爽は顔を向けた。いまの苺の声の響きは、いささか普通ではなかつた。じつと見つめてくる苺に、爽は眉をひそめた。なにやら様子がおかしい。夢のような味を楽しんでいるものと思っていたのに、落ち込んだ様子で肩を落としている。

思わず『苺』と呼びそうになつて、口を噤む。

「鈴木さん、なんですか？」

声をかけると、苺はひどく気まずそうに顔を歪めた。

これはいつたい？

「どうなさつたんですか？」

爽の問いかけに、黙りこくつていた苺の頬が急に赤く染まつた。

な、なんなのだ？ なぜ、赤くなる？

戸惑つていると、苺は泣きそうな顔になつた。

「鈴木さん？ 何があつたんですか？」

爽はハッとした。

「もしかして……」

爽は苺の手からスプーンを取り上げ、ガラスの器を掴み、イチゴヨーグルトを一口食べてみた。

泣きたいほど不味いのかと思ったのだが、別段味はおかしくない。

爽は首を傾げ、ベソをかいている苺に尋ねた。

「味は……別に悪くないようですが？ 何がお気に召さなかつたのですか？」

「そ、そうじゃなくて」

首を横にぶんぶん振り、苺は唇を歪める。

「い、苺……店長さんに気づかれないように……ひ、ひとりで全部食べちゃおうつて……姑息なこととしちゃつてるつて気づいたら、すつごい嫌な気分になつちやつて……」

その言葉に、爽はぽかんとした。次第に笑いが込み上づてくる。

「気づいていましたよ」

「へっ？」

「この距離にいて、気づかないはずがないでしよう？」

「で、でも店長さん、パソコンに夢中になつてて……」

泣き顔でそう言つた苺は、急に目を見開いたかと思うと、とんでもなく気まずそうな表情になつた。

「……気づいてですか？」

いまにも消え入りそうな風情で、危うく噴き出しそうになる。

どうやら彼女、自分が姑息なことをしたという事実に、心が押しつぶされそうになつていてるらしい。まったくわかりやすいな。それに、これくらいのことでの、そこまで良心の呵責に苦しむ必要もないだろうに……

これが鈴木苺という人物の内面というわけか……魂が澄み切つているらしい。ちょっとした悪事にも激しく落ち込んでしまうほどに……

そんなことを考えている自分に、爽はくすりと笑つた。

「そうか……だから、私はこんなにも、彼女に興味を惹かれるのかもしれない。

「それで？ イチゴヨーグルトはもう食べたくないんですか？」

爽に問われた苺は、彼が手にしているイチゴヨーグルトに目を留める。

「店長さん、食べたかつたら……」

どんな気持ちで譲るつもりか知らないが……

「私はいまは欲しくありませんから、鈴木さん、お食べなさい」

そう言つた爽は、知らずイチゴヨーグルトをスプーンにすくい、苺の口元に差し出していた。

自分の取つた行動に爽は戸惑つたが、苺はためらいも見せず、パクンと口に入れた。

戸惑いはあつという間に笑いに変化した。込み上げてくる笑いを、爽は必死に抑え込んだ。

なんなんだろうな、彼女は……？ そしてそんな彼女に、私は影響されっぱなしだ。だが、それが嫌ではない。

「美味しいですか？」

笑いが込み上げてならない爽は、なんとか真顔で口にした。だが、今度は笑いに加え、なぜか苛立ちまで込み上げる。笑いの神の上を行くな、彼女は……。

まつたく、笑つてている自分に苛立つなんて、初めてのことだ。

そんな爽の複雑な心情などおかまいなしに、苺はイチゴヨーグルトを味わつている。

「おいしい……」

ぼそりと口にし、涙で濡れたほっぺたを、手の甲でぐいっと拭う。

やれやれ……すでに成人しているというのに、年端とちはもいかない子どもと一緒にだな。

呆れているにもかかわらず、なぜかまた、ヨーグルトを山盛りにすくつて、彼女の口に運んでやる。なんなんだいったい。自分が一番理解できないぞ……

「店長さん、ありがと」

最後の一囗を食べて、苺が照れ隠しに笑いながら呟いたとき、爽の胸で、何かが弾けた気がした。

7 やつかいな対戦相手 ～苺～

ガラスの器を洗つて戻つてくると、店長さんはまたパソコンに向かっていた。そんなに一生懸命、パソコンで何をしているのか知りたくてならなかつたが、質問などしたら、店長さんの邪魔になる。たつたいま、イチゴヨーグルトのことで、迷惑をかけちやつたばかりなのだ。

あー、それでも恥ずかしいところを見せちゃつたよ。

もう絶対、あんなことしない。今度からは必ず、店長さんと分け合つて食べるとしてよう。寝るにはまだ早いし、店長さんの仕事が終わるまで漫画でも読んでいようと、苺は書棚の前まで

行つたが、そこで目的を変えた。久しぶりにテレビゲームでもしよう。

いそいそとゲーム機を準備し始めたところで、苺はピタリと手を止めた。

考えたら、テレビゲームの音つてすごく騒々しいし、それこそ店長さんの仕事の邪魔になりそうだ。

ここは苺の部屋だから、優先権は苺にあるとしても……

よし、ここはひとつ、やってもいいかどうか直球で聞くとしよう。遠慮なんてしない店長さんだから、嫌なら嫌とはつきり言うに決まつてる。

「店長さん、テレビつけてゲームしてもいいですか？」

「ええ。構いませんよ」

了承を得られたが、返事の前の間が、ちよいと気になる。

「ほんとにいいですか？」

「構わないと言いましたよ」

少し機嫌を悪くしたように、店長さんは言う。
だーかーら、その間が気になるんだってば……と内心不服に思つたが、やつてもいいと言われたのだし、苺は気にするのをやめた。

テレビをつけ、ゲームをスタートさせる。こいつは、苺が大得意のパズルゲームだ！ 世の中、いろんなパズルゲームがあるが、こいつはやり込み度が違う。

子分扱いする傲慢な兄貴も、憎たらしい剛も、このゲームでは苺に勝てないのだ。

最近は、健太も剛も、自分が負けることがわかつているため、どんなに誘つても、苺とこのゲー

ムをしようとはしてくれず、つまらないつたらない。コンピューターばかり相手にしていたから、やる気を失つてしまい、このところ、このゲームとは疎遠になつていたのだが……。店長さんが相手になつてくれたなら楽しそうだけどなあー。ゲームなんかやるおひとじやなさそうだ。

「それは？」

ゲームの開始音と共に、背後から店長さんが呼びかけてきて、苺は振り返った。

店長さんは、じーっとテレビの画面を見ている。

「ゲームです。パズルゲームなんですか？」

「ほお、パズルですか」

「やつたこと、あります？」

「ええ。多少は」

意外な返事に苺は驚いた。木登りと違つて、こちらは経験済みらしい。
「やつてみます？」

期待を込めて尋ねてみる。

店長さんは、そっこ手ごわい相手になりそうだ。さすがの苺も負けちゃうかもしれない。

木登りの経験などこれまでなかつた店長さんに、苺、見事に負けたもんなあ。

「それでは氣分転換に、少しだけ……」

そう言つて始まつたゲーム対戦。店長さんは、木登りと同じく、このパズルゲームを初めてやるにしてはうまかつた。だが、このゲームを得意中の得意とする苺の敵ではなかつた。

「もう一度」

負け続けた店長さんは、ちょっとヤバイ感じになっていた。

すでに一時を過ぎ、明日は仕事だというのに、店長さんは寝る素振りをまったく見せず、そのうえ対戦相手である苺を寝かせる気もさらさらないらしい。

「あのー、そろそろ寝ないとですね」

遠慮しつつ言うと、店長さんは無言で苺をじーっと見つめてきた。その目が恐い。

マジで、目が据わってるし……

まさか、店長さんが勝利するまでやめないてこと? ど、どうしよう?

店長さんを誘ったことを後悔しつつ、もはや、何回目になつたかわからないほど回数を重ねたゲームを再開する。わざと負けてしまいたいけど……そんなことしたら、勘の鋭い店長さんだもんなあ。

間違いなく気づくだろうし、どんなに憤ることか……

二時近くになると、もう目を開けていられないほど眠くなってきた。普段、苺は十時半くらいには寝ているのだ。十二時過ぎまで起きていることなど、滅多^{めった}にない。

……遠ざかる意識の彼方^{かなた}で、店長さんの「鈴木さん」と呼ぶ声が聞こえる。

コントローラーを両手に握りしめたまま、苺の身体はついに横倒しになり、頭は、店長さんの膝の上に転がつた。

額にやさしく触れるものが、苺を心地よい夢へと誘う。彼女は満ち足りた気分で「はーい」と返事をしたが、声にはならなかつた。

8 やり遂げた気分 ～爽～

まつたく、彼女ときたら、根性がないな。勝負の途中で寝てしまうなんて……

ついに勝ちを握れそุดと期待していたところで、苺の異変に気づいたのだ。彼女は身体をゆらゆら揺らしていて、目を覚まさせようと名を呼んだのに、逆にその呼びかけに誘われたかのように、ついには横倒しに倒れてきたのだ。そしていま、苺の頭は自分の膝の上に転がっている。

まつたく、この私に膝枕をさせることは……

「うーん……むにゅむにゅ……ほふーっ」

おかしな寝言に、爽は堪らず噴き出した。

くすくす笑いながら、苺の頭に触れると、いたずらをしてやりたい気分に駆られ、爽は苺の髪を滅茶苦茶にかき乱した。ぼさぼさになつた髪型は、なんともやばつたのだが……微笑ましい。

苺の髪をつんつんと軽くひっぱりながら、まるで子どものようだ、と思う。

もちろん、鈴木苺は成人した女性だが……これほどまでに個性を持った女性には、今までお目にかかつたことがない。

それにしても……腹立たしいな。

対戦途中のまま停止させたテレビ画面を見つめ、焦れつたくなる。

初めてやるゲームというハンデはあつても、この私がいくらやつても勝てないなんて……しかも相手は……

自分の膝の上で寝ている苺の顔を、じつと見つめる。なんとも気持ちよさそうだ。いや、満足そういう……か。

「私に勝ちまくつて寝たのだから、それは気分がいいだろうな。鈴木苺」

爽の言葉が意識の底に届いたのか、苺は満ち足りた笑みを浮かべ「むん」と言つた。

「寝ていても、貴女は面白いですね。鈴木さん」

「う……で……」

腕?

夢でも見ているのか?

爽は苺の耳元に唇を近づけた。

「笑つて」

そう囁いたがなんの反応もなかつた。くーくーと寝息を立ててているだけだ。
なんだ……つまらないな。

えくぼの浮かんでいない苺のほっぺたを人さし指で突いてやる。すると、パチンと手を払われた。
ぎよっとして手を引いたが、むかむかしてならない。

寝ぼけているとはいえ、この私の手を払うなんて、鈴木苺、無礼すぎるぞ。
数秒、苺を睨んでいた爽は、いまの自分を客観的に見て、いたたまれなくなつた。私ときたら、

何をやつているんだか……夜中の二時に、寝ている人間を相手に……

爽はさつと立ち上がりつた。当然、膝の上に乗つていた苺の頭は床に落ちた。
起きるかと思ったが、いつこうに目の覚める気配はない。床にころりと転がつたまま寝ている苺
を眺めた爽は、自己嫌悪に陥る前に、苺を抱き上げた。

ベッドに運んで寝かせてやる。

別段頭を打つたような音はしなかつたが、コブでもできていたら、と心配になり、頭を撫でて確
認した。

「大丈夫らしいな。鈴木さん、頭は痛くないですか？」

声の大きさを抑えることなく話しかけたが、これまたなんの反応もない。

どうやら、とことん熟睡するタイプのようだ。

ならば……

にやりと笑つた爽は、ベッドの上に両手を突き、思いきりベッドを揺らしてやつた。身体が跳ね
るほど揺らしたというのに、苺はまったく目覚めなかつた。

「うーむ。見事だな。これほどまでに熟睡できるとは……」

だが、逆に心配になる。これでは、天変地異が起きたとしても、目を見ましそうにない。
いや、彼女は相当運が良さそうだからな。寝ていても怪我ひとつ負わずに助かるかもしれない。
……さて、私も寝るとするか……

苺の寝顔を見ていたら、急に眠くなつてきた。込み上げる欠伸を噛み殺しながら、爽は苺の隣の

スペースに潜り込んだ。

うん……

目が覚めた爽は、いくぶんすつきりしない頭に顔をしかめ、額に手を当てた。
寝不足か……ああ、そうか、昨夜……

爽は隣の布団の膨らみを見つめた。鈴木苺は、まだ寝ているようだ。

時間を確認すると、そろそろ起きるべき時刻……

気だるさを感じながら起き上がり、洗面所に行つて顔を洗う。

タオルで顔を拭いていた爽は、洗面台の上にある置物に目を留めた。実をいふと、昨日から置いてあるのに気づいていたのだが……

顔を近づけてじっくりと見つめる。苺の持ち物らしい、可愛らしいペンギンだ。

荷物を運び込んで、すっかり彼女の部屋らしくなったな。

もともとここは私の避難場所だったのだが……いまや居候の身か……

新しい避難場所を、さつさと手配すればいいことなのだが……この妙な事態を楽しんでいるから、いまはそんな気になれない。

爽の屋敷に居座っている祖母も、そろそろ飽きてくる時期だろう。なにせ、すでに十一月。楽しいことの好きな羽歌乃さんは、クリスマスのイベントに夢中になるはず。近いうちに自分の屋敷に引き揚げるだろう。そうなれば、自分が逃げ回る必要もなくなる。

ベンギンの頭を指でそつと撫で、爽は身支度を整えた。部屋に戻り、苺を窺つたが、まだ起きる気配はない。このままでは仕事に間に合わなくなるから、起きてもらわなければ困るのだが……無理に起こすのも気がひける。

昨日、ゲームに負け続けて気が收まらず、そろそろ寝ようと言われても、頑として受けつけなかつたからな。もう少し寝かせておいてやろうと朝食の準備をする。

大平松の作ってくれた朝食をテーブルに並べ、それから苺の持ってきた包みを、胸を膨らませながら開く。おむすびが顔を出し、ふわっと良い香りが漂うと、口元が自然とほころんでしまう。なんとも美味しいそうだな。……四つもあるし、一つくらい先に食べても、と手を伸ばしかけたが、思い直して引っ込める。

いやいや、私のために作つて来てくれた約束の品だが、断りなく食べてしまるのはよくない。

和柄の皿におむすびを並べ、苺用に紅茶、自分で用意した緑茶を淹れた。

もう起こしてもいいだろう。時間もないし……そろそろ食べ始めないと、本当に遅刻することになる。

ベッドに近づき、苺の顔を覗き込む。

「鈴木さん、起きなさい」

呼びかけたが、反応はない。

「鈴木さん？ 起きなさい、鈴木さん」

だめか……ただ、声をかけるだけでは駄目らしい。寝ている女性に触れるというのは、いいこと

ではないと思うのだが……まあ、この状況では致し方ないか……

ためらいを捨てた爽は、苺の肩に手をかけて大きく揺らす。ゆさゆさと身体は揺れるものの、瞼まぶたはまるで張り付いているかのように、開く気配がない。

まったく、なんでここまで熟睡できるんだ？

「起きなさいと言っているんですよ」

せつからぬれた緑茶も冷めるし、なにより、大事なおむすびが乾燥して表面がパリパリになつてしまつたらどうするのだ。

まだ起きない苺を、爽はぐつと睨みつけ、両肩をがつちりと掴んだ。

「鈴木さん、鈴木さん、起きなさいっ！」

声を荒らげながら、手加減なくさらに揺さぶつてやる。

ついに瞼が開いた。

「ふはあい？」と、おかしな返事をする。

やり遂げた気分で、爽はほつと息をついた。

9 世界、プチ崩壊 ～苺～

うによつ？

苺の目の前に、爽やかで男前な店長さんの顔があつた。

「起きましたか？　さあ、顔を洗つていらつしやい。仕事に遅れますよ」

し、仕事……ああ、もう朝なんだ。……起き……なきや……

そう思う一方で、魅力的な眠りの森にふたたび引き込まれそうになる。

「鈴木さん」
ぐいっと身体を引つ張り上げられ、苺は強制的にベッドに腰かけさせられた。だが、身体はこんなにやくみみたいに、ぐにやりと曲がる。

「鈴木さん」

店長さんの声の調子はだんだん上がり、ボリュームも大きくなつてゆく。

ますいな。これは起きないと……

「ふあい。わかつてまふよ」

自分では、『はい。わかつてますよ』と、ハキハキ言つているつもりだった。だが実際は、ハキどころか、あくび交じりに口にしているわけで……

苺は眠気をなんとか追い払おうと、手の甲でごしごしと瞼まぶたをこすつた。

起きろー、苺、起きるんだあー。

わかつちやいるんだよ。わかつちやいるんだが……

「わわっ！」

身体が浮き、驚いて叫んだ苺は、気がつくと店長さんに抱えられていた。

「な、な、な？」

「本当に時間がないんですよ。顔を洗つていただきます」

強制的に移動させられた苺は、洗面台の前に立つていた。

苺つてば、店長さんにとんだ迷惑をかけちゃつてるよ。

「ど、ども。すみません」

申し訳ない気持ちをたっぷり込めて、ぺこぺこ頭を下げて謝ったものの、これってちょっと違うんじゃないかい、と自分に突っ込みを入れる。だって、苺がこんな状態なのって、店長さんが夜更かしを強制したからだしなあ。

そのとき、水音が聞こえてきた。

目を瞑つたままだつた苺は、薄目を開けてみる。

「ほら、顔を洗いなさい」

こくりと頷いた苺は、流れ落ちる水に手を伸ばし、顔を洗つて口をゆすいだ。

「鈴木さんの持ち物があちこちに置かれて、ずいぶん雰囲気が変わりましたね」

顔を拭いた苺は、店長さんの見つめているものに目を留めた。

ああ、剛のペンギンさんか……

「可愛いでしょ？」

顔を洗つてようやく眼気が取れた苺は、ペンギンの頭をちゃんと小突く。

「ええ。可愛いペニギンですね。表情に愛が感じられていい」

ペンギンは、見つめる者をあどけない目で見返してくる。その表情からは、確かにあつたかな愛が伝わってくるようだ。

「剛が旅行のお土産でくれたんです。あいつは可愛くないけど、こいつは可愛いです」

「……剛？」

「はい」

苺は頷き、洗面所を出た。

家の近くに昔つから住んでるんですよ。お兄ちゃんに懐いてて——なのに、二号つて呼ばれてる哀しいやつです」

後ろにいる店長さんに向かつて振り返り、苺は説明した。

「二号？」

「二ノ宮剛で、二号ですよ。剛は、岡にカタカナのりがくつついた漢字で、こうとも読むから……お兄ちゃんが、そうあだ名をつけたんです」

苺が兄の健太から一号と呼ばれているのは、もちろん内緒だ。
「憎まれ口ばかり叩くんです。自分が二号なのが気にいらなくて、苺のこと二号つて呼ぶんですよ。失礼しちゃうたら」

「二号……苺……三号……。ははあ」

独り言のように呟いたあの、ははあと納得したような声に、苺はぎくりとした。

「では、鈴木さんが一号なわけですね？」